

「男、突っ走る！」

第36回

第一稿

作・壽倉 雅



1 名古屋芸術専門学校・全景

2 同・4階・廊下

雅也と浩平が昼食を食べている。

浩平「どうする？ バーベキューのメンバー、もう締めきろうか？」

雅也「そうだね。俺の中では四人ぐらいいれば十分だと思ってたけど、まさか八人も集まるとは思わなかったな。しかもほとんどが、学園祭のお化け屋敷のメンバーだからね」

浩平「それな。専攻もバラバラだし」

雅也「この間、鈴木先生に言われたもん」

浩平「何て？」

雅也「お前らの代は異常だって」

浩平「どうして？」

雅也「授業もほとんど被ってない専攻同士の学生が、プライベートでみんなが集まってワイワイするなんて、先輩たちはやってないからだって」

浩平「へえ。みんなが集まることって楽しいのにな」

雅也「俺もね、最初は専攻内で普通に授業受けて、課題やればそれで良いって思ってた。でも、こうやって眞柴田みたいに専攻外の友達と遊ぶ時間も悪くないなって思い始めてね。俺、高校まではほとんど学校外で友達と遊ぶことなんてなかったんだよ。まあ遊ぶところがなかったっていう言い方のほうが正しいのかもしれないけどね。でも、ここに通い始めたらさ、ファミレスはあるし、居酒屋もあるし、ゲーセンもあるし、カラオケもあるでしょ。学校帰りとか、休みの日に遊んだら楽しいだろうなって、インドアからアウトドアになったんだよ」

浩平「意外だわ。うちーは、結構遊ぶタイプだと思ってた」

雅也「全然。キャンプとかも、あまり興味なかったの。でも、今になって後悔してる。アウトドアって、こんなに楽しかったんだ

なつて。だから、眞栄田がバーベキュー誘  
ってくれたときは嬉しかった。友達とバー  
ベキューなんてやったことなかったから」

浩平「それは良かった。まあ、学校外のプラ  
イベートな時間だから、気軽に楽しめば良  
いんだよ」

雅也「まあ、それもそうだね」

と、403教室から雪奈が出てくる。

雪奈「あれ、二人とも自習？」

浩平「うん」

雅也「ゆきちちゃんも？」

雪奈「うん。秋のイベントに出店する作品作  
るんだけど、そのデザイン考えてたの」

雅也「雑貨で何か出すの？」

雪奈「まあね。でも所詮一年生の私が作る作  
品だから、大したことないと思うけど」

浩平「そんなことないんじゃない？ 出すこ  
とに意味があると思うし、夏休みにこうし  
て自習に来てるだけで、同級生との差はつ  
いてると思うぞ」

雅也「鈴木先生もおっしゃってたもんね。連休の間に、学生の能力に差が生まれるって。高い学費払ってる分、学校を使いまくれておっしゃってた意味が、今になって分かる気がする」

雪奈「けど、夏休みに学校に来てるメンバーって、大体決まってきたちゃってるね」

浩平「そういうもんだろ」

雅也「あ。ねえ、雪奈ちゃんもバーベキュー行かない？」

雪奈「バーベキュー？」

雅也「うん。ちょうど眞榮田と相談してて、九月の第二週から二週間休みがあるから、その間にやろうかなって話になって」

浩平「お化け屋敷メンバーを中心に誘ってたけど、植野さんに声かけてなかったな」

雅也「俺もうっかりしてた。今日雪奈ちゃんに会ってなかったら、タイミング逃すところだったわ」

雪奈「九月の二週目でしょ。(とスマホを見

ながら）うん、先に日程決めてもらえたら、調整できると思う」

雅也「ありがとう」

浩平「グループLINE、招待しとくわ」

雪奈「あれ、私って眞榮田君のLINE知ってたっけ？」

浩平「あ、無いわ」

雅也「じゃあ、俺が招待しとくよ」

雪奈「ありがとう」

雅也、スマホを開いて、操作をする。

3

木曾三川公園

バーベキューをしている団体が、何組もいる——その一角で、バーベキューセットに炭を入れながら火起こしをしている浩平、雪奈、篤志、裕司、拓海。

裕司「全然、火がつかねえ」

拓海「何でだろう（とうちわであおぐ）」

雪奈「火のつけ方がダメだったのかな」

篤志「もう一回、火つけてみる？」

裕司「そうするか」

と、紙にライターで火をつけ、炭の塊へ放り投げる。

軽自動車が止まり、運転席から雅也、助手席から和也、後部座席から瑞枝と夏美が買い物袋を持って下りてくる。

瑞枝「食材買ってきたよ」

雅也「ごめんね。車が混んじゃってて」

浩平「ちようど今、火起こししてたところ」

和也「火ついた？」

裕司「最初弱かったから、今、火つけたところ」

篤志「火、強くなってきたから、鉄板乗せるか」

浩平「そうだな」

浩平と篤志が、手袋をはめて、鉄板上に乗せる。

夏美と瑞枝が、鉄板に油を塗る。

和也、裕司、拓海がパックの肉を乗せる。

浩平「よし、焼くぞ！」

と、トングで要領よく肉を焼く——まな板を取り出し、野菜を切っている雅也。手伝っている篤志。

雅也「野菜も食べてよ、ちゃんと」

裕司「似合うな、うちー」

雅也、笑って返す——それぞれに楽しんでいる一同。

× × ×

夕方——。

バーベキューの片づけをしている一同。

雅也「眞榮田、ちよつと良い？」

浩平「おお」

と、川の近くに呼びだす——雅也、一

瞬振り向き、雪奈に目で合図を送る。

頷く雪奈。

浩平「どうしたの？」

雅也「今日は、ありがとう」

浩平「何だよ、改まって」

雅也「いや、良い時間だなあとと思って」

浩平「まあ、それは言えてるわな」

雅也「そういえばさ、九月二十七日って、眞

榮田の誕生日でしょ？」

浩平「そうだけど」

雅也「ちよつと早いけど、（と大声で）眞榮

田、お誕生日おめでとう！」

と、クラッカーを鳴らしながら、一同  
が合流する。

一同「おめでとう！」

浩平「え、何何？」

雪奈「私たちからのサプライズよ」

浩平「サプライズ？」

裕司「眞榮田、おめでとう！（とパーティー  
用ケーキを浩平の顔に当てる）」

篤志「おめでとう！（とパーティー用ケーキ  
を浩平の顔に当てる）」

泡まみれになる浩平——その様子をス  
マホで撮影している雪奈。

浩平「（笑いながら）やってくれたな」

雅也「サプライズ大成功！（と拍手をする）」

拍手をする一同。

浩平「うっちー、今日着替え持ってきてる？」

雅也「川だから、濡れるの覚悟して来たから

ね」

浩平「じゃあ、そこ立って」

雅也「え？」

と、川の前に立つ雅也。

浩平「あっち向いて。太陽のほう向いて」

雅也、浩平に背を向ける。

浩平「はい、太陽に向かって何か一言？」

雅也「一言？」

浩平「良いから」

雅也「今日は最高の一日……」

と、雅也の背中を蹴とばす浩平。

雅也「あッ……」

と、川に落ちる雅也——啞然とする一

同。

雅也「やってくれたな」

と、手を差し出すと、浩平を引っ張る。

浩平も川に落ちる。

浩平「おい、うちー」

雅也「顔の汚れが取れて良かったでしょ。俺  
一人が濡れるなんて不公正だもん。道ずれ  
じゃいッ」

と、笑いながら濡れた服を絞る。

浩平「良かった、俺も着替え持ってきてて」

雅也「あ、俺、眞榮田に着替えの確認してな  
かったわ」

浩平「そうだぞ」

雅也「やっちまったわ」

雪奈「ちゃんと全部動画に残したからね」

雅也「雪奈ちゃん、またグループに送つとい  
て」

雪奈「もちろん」

裕司「この後、どうする？」

拓海「俺は全然良いけど」

夏美「私も」

瑞枝「私も一日フリーにしてある」

和也「ごめん、俺はこれで帰る」

浩平「分かった。じゃあ、この後残れる人は、

みんなでオールするか」

雅也「賛成ッ。でもその前、俺たちは着替えよう」

4 アミューズメントパーク・全景（夜）

5 同・ビリヤード広場

浩平と雪奈がビリヤードをしている。

雪奈「うまいね、眞榮城君」

浩平「そうでもないよ」

雪奈「私、全然下手くそだもん。そもそも、

あんまりルール分かってない」

浩平「楽しめば良いって」

6 同・ダーツ広場

ダーツをしている篤志、拓海、裕司。

拓海「ああ、また外した」

裕司「ぐっちは、音ゲーはできても、こういう

うのは苦手なんじゃない？」

と、裕司がダーツを的に当てる。

拓海「結構良いところ行くじゃん、おっくー

だって」

裕司「まあ、ぼちぼちだよ」

と、篤志がダーツを的の中心部に当てる。

裕司・拓海「すご……」

篤志「コントロール第一だ」

## 7 同・カラオケ会場

カラオケで歌っている夏美——マラカスを振る雅也と瑞枝。

雅也「歌上手いよね、なっちゃん」

瑞枝「なっ姐さん、最高！」

夏美「ありがとう！」

と、次の曲が流れる。

雅也「あれ、これ二人で歌うパターンじゃん」

瑞枝「うっちー、歌おう（とマイクを渡す）」

雅也「とりあえず、頑張るわ」

と、雅也と瑞枝で歌い始める——リズムに乗っている夏美。

8 同・ビリヤード会場

裕司が通りかかる——浩平と雪奈が仲  
良しそうにビリヤードをしているとこ  
ろを見かける。

9 同・マッサージコーナー

雅也がやってくると、マッサージチェ  
ア—に腰かける——ゆっくりと目を閉  
じる。

10 同・全景（翌朝方）

11 同・マッサージコーナー

浩平、裕司、瑞枝、夏美、拓海、雪奈、  
篤志がやってくる——雅也の姿が見え  
る。

浩平「何だ、うちーここにいたんだ」

雪奈「うちー、帰るよ」

と、ぞろぞろと去っていこうとする—

―が、雅也が来ないため、一同振り返る。

裕司「あれ、うちーは？」

瑞枝「うちー」

と、雅也の前に来る。

瑞枝「あれ、うちー寝てるよ」

一同「え？」

と、一同雅也の前に来る――座ったま  
ま口をポカんと開けて眠っている雅也。

拓海「すげえ、うちー座って寝てるよ」

雪奈「面白いから撮るところ」

と、スマホを取り出し、写真を撮る――  
周囲に気づかず、まだ眠っている雅也。

12 名古屋芸術専門学校・全景（数日後）

13 同・402教室

裕司、拓海、篤志、和也がパソコンで  
作業をしている。

裕司「この間は、本当に楽しかったな」

篤志「ああいう時間も、たまには良いもんだよな」

拓海「またやりたいな」

和也「最後に送られてきた写真は何？」

拓海「写真？」

裕司「うちーが眠ってる写真のことじゃない？」

拓海「ああ、あれか」

和也「あの状態で眠ってたの、うちー？」

篤志「俺たちもびっくりしたよ。面白かったから良いんだけどさ」

裕司「どこでも眠れるっていう特技が見つかったな」

拓海「最後まで持ってるね、うちーは」

篤志「あ」

裕司「どうした、あつぼん？」

篤志「そういえば、海外研修の話がそろそろ出てくるんじゃないかな。先輩が言ってた」

裕司「確か、アメリカは十一月だったな」

拓海「みんなは行くの？」

裕司「俺は行く」

和也「どうしようかな。俺は別に良いかなって思ってる」

篤志「俺は行くよ。こういう時じゃないと、アメリカになんて行けないし、みんなで行ったら絶対楽しいじゃん」

裕司「それは間違いない」

拓海「他のみんなは、どうするのかな？」

14 同・屋上

瑞枝と夏美が弁当を食べている。

夏美「みずちゃんは、アメリカ研修行くの？」

瑞枝「行くよ。姐さんは？」

夏美「もちろん。だって、ハリウッドだよ。」

私たちCG映像専攻からしたら、本場と言っても良いところなんだから」

瑞枝「だよ。せっかくの機会だもんね」

夏美「私たち映像専攻は、全員行くんじゃないかな」

瑞枝「そりゃ行くでしょ。むしろ、行かない  
っていう選択肢出す人、いると思う？」

夏美・瑞枝「いないよね」

と、笑い合う二人。

15 同・4階・廊下

雅也が階段を下りてくる——エレベーター  
前の椅子で、浩平と雪奈が座って  
弁当を食べている。

雅也「お疲れ、二人とも」

雪奈「お疲れ、うちー。どこにいたの？」

雅也「五階で原稿書いてたの」

浩平「やっぱり五階が落ち着く？」

雅也「まあ、あの部屋が文章系の本拠地だからね。四階はさ、みんなに会おうと思って  
来てるの」

浩平「そっか。昼食べた？」

雅也「うん。ちょっとトイレ行こうと思って  
下りてきたただだから」

浩平「ああ悪かったな」

雅也「ううん、大丈夫」

雪奈「眞榮田君。さっきのやつ見てくれる？」

浩平「ああ。良いぞ」

と、二人揃って403に入っていく―

―訝しそうな顔の雅也。

16 同・同・男子トイレ

雅也が入ってくると、裕司が手を洗っている。

雅也「お疲れ、おっくー」

裕司「お疲れえ」

雅也、用を足す。

裕司「うっちーも、気になってるんだろ」

雅也「え？」

裕司「眞榮田と雪奈ちゃんのこと」

雅也「まあね。この間のバーベキューから、

妙に仲が良くなってるような気がして」

裕司「確か、眞榮田のサプライズ考えたの、

雪奈ちゃんだろ」

雅也「うん」

裕司「多分、それで意識し始めたんじゃないかな」

雅也「そんな単純かな」

裕司「俺が言うのもなんだけど、男っていうのは単純なんだよ」

雅也「そう？（と手を洗い始める）」

裕司「うっちーだって、同じ立場になった時に考えてごらんよ。誕生日のサプライズをみんなで祝ってくれた言い出しっぺが女の子で、盛大に祝福してくれたら、少しは意識しない？」

雅也「うーん、まあ誕生日を知ってくれてたっていう喜びはあるかもしれないけどね」

裕司「うっちーって、付き合ったことないの？」

雅也「あるわけじゃない。今の生活を見て分かるかもしれないけど、女友達はできやすいタイプだけだね」

裕司「なるほど。でもまあ、多分あの二人は、おそらく近いうちに付き合うだろうな」

雅也「うん……俺もそんな気はしてる。『あ

れ、もしかしてこの二人付き合ってるの

か？』っていう勘、俺結構当たるんだよね」

裕司「じゃあ、間違いないな。俺もそうだと  
思ってる。まあ、近いうちにどっちかが言  
い出すんじゃないかな。俺も結構そういう  
の鋭いから。じゃあ」

と、出ていく。

雅也「眞榮城と雪奈ちゃんがねえ……」

不思議そうな顔の雅也。

17 同・同・403教室く廊下

浩平と雪奈が仲良さそうに談笑しながら  
自習をしている。

つづく